

沖縄における“死者を送る人々” — 八重山諸島与那国島の“ムヌチ”の事例から —

古谷野 洋子[※]

本論の目的

内地とは異なった歴史を歩んできた沖縄には檀家制度はない。明治になるまで寺院は主に沖縄本島の首里那覇に集中していたのみであり、先島と呼ばれる宮古・八重山地方には王府及び薩摩藩の政策でそれぞれの地方に1寺院が置かれたのみであった。そのため、沖縄の僻地・離島等では葬祭業者が関与するまでは島の人々の葬儀に僧侶が関与することはほとんどなかった。では、人々はどのように死者を送ってきたのだろうか。

沖縄県八重山諸島与那国島（以下、特別の場合を除いて与那国と記す）では「葬式に坊さんはいらない」といわれていて、今でもムヌチ・ニガイト・カミンチュなどと称する霊的職能者たちが葬儀において死者を送る役割を果たしている。本論は与那国の葬送儀礼を報告し、葬儀において死者を送る霊的職能者とその役割について考察するものである。

ここで本論における“死者を送る人々”について定義したい。本論における“死者を送る人々”とは葬儀に際して死者の魂をあの世界に送るための行為を専門に司る職能者とする。沖縄では葬式後にもナーチャミー（死後3日目）や、四十九日までの7日おきの法事、その間に行われるマブイワカシ（与那国ではチーバガシという）、洗骨、三十三年忌までの焼香などさまざまな死者に関する儀礼が行われる。本論ではこれを広義の死者を送る行為ととらえ葬送と記す。そして、通夜・出棺・墓室内への入棺あるいは納骨（火葬の場合）までを狭義の死者を送る行為ととらえ、葬儀あるいは葬式と記す（葬儀と葬式は文脈で使い分ける）。本論では主に葬儀・葬式に際して“死者を送る人々”を扱うが、広義の葬送という視点にも留意する。

では、沖縄における“死者を送る人々”に関してはどのような研究があるのだろうか。伊波は「祭政一致時代には、葬式を司会するものは、勿論祝（ノロ）と証する神人であった。その遺風は今なほ辺鄙な地方などで時偶みることがある」と記し、勝連半島で僧侶を雇うかわりにノロにオモリ（オモロ）をうたわせることをきいたと述べている。そして伊波は君南風の葬式の時のオモリなどから神人の葬式の様子を推察し、古くは神職の葬式の時ばかりでなく上は国王の葬送より下は庶民のそれに至るまでオモリが歌われたに相異なるという（伊波1979（1939初出）：162-167）。酒井卯作は「僧侶などに死に関する一切のものをゆだねる以前に、もし死者の魂を司るのが存在するとすれば、それは家庭の中の霊的に優れた女性たちであった。さらにこの呪術行為をいっそう確かなものにするならば、ユタという職能者に頼むことになるだろう。そのユタは往々にして神女であるノロの機能も兼ねている」と述べている（酒井1987:572）。酒井卯作のいう”

※神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員

死者の魂を司る”ことが実際どのような行為を指すのかは明確ではないが、専門の職能者が関与する以前は”家庭の中の霊的に優れた女性たち”が死者を送る役割を担っていたのは考えられることである。しかし、これら従来の研究では一般の人々の葬儀において誰がどのようにして死者を送ったかということは論じられていない。また、両者ともに論じているのは過去における”死者を送る人々”についてである。

本論では与那国の葬儀の事例から”死者を送る人々”の役割をまとめ、なぜ今でも僧侶ではなく島の”死者を送る人々”がその役割を担っているのかについて考えたい。ところで、”死者を送る人々”について考える際、忘れてならないのはネンプチャー（念仏者）である。沖縄には”死者を送る人々”としてネンプチャーと呼ばれる人々がいた。八重山諸島にも近年までネンプチャーが存在し、彼らは葬儀には欠かせない集落の公的な存在であった。本論では、与那国の”死者を送る人々”と八重山のネンプチャーの役割を比較検討することによって与那国の”死者を送る人々”がどのような役割を担っているのか、その役割はどのような死後の世界観に基づいているのかを考えたい。また、”島で死者を送る”という視点から与那国の”死者を送る人々”の存在についても考察したい。

1 与那国の葬送と死者を送る霊的職能者

日本最西端にある与那国島は周囲約 28 キロメートル、面積約 29 平方キロメートルの孤島である。八重山諸島の中心である石垣島から最も遠方にあり、天気の良い日には台湾の島影が見える。1 島で与那国町を形成し、祖納・比川・久部良の 3 つの集落からなり、人口は約 1500 人（約 760 世帯）である。

八重山諸島に寺院ができたのは 17 世紀初期のことである。薩摩藩は侵攻後、琉球全土の検地を行なったが、寺もなく人々は宗旨の何であるかも知らなかったという先島（宮古・八重山の総称）の検使の報告から先島にも寺院を建立するように王府に命じた（外間・波照間 1997：195）。これが石垣島の桃林寺である。1875 年に布達された「富川親方八重山島取締帳」には、派手に行われるようになった焼香・茶毘の簡素化を命じた「葬礼定め」が設定されている。そこには、坊主を招請する場合は頭以下目差までは 2、3 人、若文字以下役についてない奉公人は 1 人に限るとあり、百姓で坊主を招請する場合は 1 人のみ、生活に困っているものは坊主を呼ばず経巾だけで済ますこととある（石垣市総務部市史編集室 1991：69）。しかし、石垣島から最も遠方に位置する与那国では僧侶を呼んで葬儀を行うことは不可能に近かったであろう（なお前文中の経巾とは仏名などの書かれた死者に掛ける布であり、現在でも与那国ではチラヌサァディと呼ばれて使用されている¹⁾。現在でも与那国には寺院はなく僧侶もいない²⁾。葬式に際して僧侶を石垣島から招く家はあるが、ほとんどの家では”葬式の時やってくれる人”に依頼する。“葬式の時やってくれる人”とは現在の与那国の”死者を送る人々”のことである。本章では与那国の葬送について述べ、与那国の”死者を送る人々”について紹介する。

(1) 与那国の葬送について

与那国の葬送については、池間栄三『与那国の歴史』・伊藤良吉「八重山よなくに島の葬制・墓制—調査ノートより—」・喜舎場永珣「八重山列島の葬送習俗」・植松明石・大沼美知子「人生儀礼」・赤田光男「与那国島の墓制と祖先信仰」・原知章『民俗文化の現在 沖縄与那国島の「民俗」へのまなざし』・酒井正子『奄美・沖縄 哭きうたの民族誌』・米城恵「葬式から三十三年忌まで」などに報告されている。

池間・喜舎場には古い与那国の葬送習俗が記録されている。酒井正子は与那国の葬送歌に初めて学術的照明を当てたといわれていて³、クイカギ、カディナディなどの「哭き」とミラヌウタ、スンカニなどのウタが交錯する与那国の死者との別れを報告している。原は葬送儀礼の舞台裏に注目し、死者儀礼の交際としての側面から与那国の葬送を論じている。米城は、葬儀の作り物に関しても詳細に述べ、作り物に書かれた仏教用語の意味を解説し、「島には寺もなく、僧侶もないが野辺送りに書かれる偈一つをとってみても、葬式などは仏教儀礼に覆われている」と記している⁴。

では、島の人々は与那国の葬儀についてどのように考えているのだろうか。人々は「与那国の葬式は情けがある」という。酒井正子が紹介したように、死者に対して「あはれどうー、〇〇(人名)」といって泣きながら言葉をかけ、葬送歌を死者にうたいかけることは死者に情けをかけることと考えられていた⁵。しかし、島の人々は「与那国の葬儀はしきたりがやかましく、粗相があってはならないと常に気を配っている」ともいう。僧侶ではなく“葬式の時やってくれる人”を頼むことについては、「与那国の人は昔からのしきたり破ったらいけないからこうするわけよ、坊さんは与那国のしきたりがわからないでしょ」という。与那国では昔からの葬儀のしきたりがあるので、与那国の葬儀のしきたりを知らない僧侶ではなく、与那国の“葬式の時やってくれる人”を頼んでいるというのである。

つまり与那国の葬儀は、哭き歌によって死者を送るものであり“情けのある葬式”といわれていて、多くの手伝いの人々の参加する交際としての面もあり、また、昔からのしきたりがやかましく、仏教儀礼に覆われながらもほとんど僧侶が関与せず島の職能者によって行われている葬儀といえよう。しかし、実際には火葬も増え、葬儀のやり方が変化していることは否めない。島の人々も葬儀のやり方はずいぶん変わってきているという。

(2) 現在の与那国の“死者を送る人々”

与那国では昔から第六感に優れ“見る人”(見える人)といわれる霊的職能者がいたという。現在、このような霊的職能者としては“神ごと”をする女性たちがいる。彼女たちは島の豊年祭やマチリをつかさどるカァブ(八重山では一般的にツカサと呼ばれる)ではなく、主にハンジ・焼香・祝い事をする女性たちであり、具体的には子供の成長祈願、生まれ年の祝い、病気の相談、漁師の大量祈願、行方不明者やいなくなった牛馬の行方の判断、海で亡くなった人の魂を救うなどの個人の依頼に携わっている。ある婦人によると、夢を見て気になったり体の調子の悪いとき、

「死んだ人の思いがあるかね、何かがあるかなー」といって彼女たちをたのみ、死者の知らせを彼女たちの口を通して聞くという。そのため、彼女たちの事をユタ（与那国ではドゥタと呼んでいた）と呼ぶ島の人もある。そして、与那国ではこれらの“神ごと”をする女性たち、つまりこれらの霊的職能者が死者を送る役目も担っている。

現在、島の死者を送る霊的職能者はO氏、M氏、Y氏である。焼香などの日程は事前にわかるが、葬式はいつ起こるかはわからない。このような時にはお互いに時間の都合をつけあって職務を行う。ここでは直接本人にうかがった話や彼女たちに関する島の話から⁶、彼女たちがどのような過程を経て霊的職能者になったのか、どのような役割をしているのかなどについて紹介する。

①O氏（1931年生まれ）

現在、与那国で最年長の“神ごと”にかかわる人であり長い経験を持つ。本人は5歳の時から“見えた”という。母親も“見える人”だった。首吊りの人が“見えた”ので、「怖いよー、怖いよー」と母親に泣きついたところ、「こんな小さなときからこんなもの見たら大変だ」といい、「この子はまだ5歳だから、この子が大人になったら神様の使いをさせてください」とねがってくれたという。若いころから墓をみると亡くなる人が見えたりしてまわりの人々に嫌がられた。神の使命ならば天に逆らわないようにしようと、“神ごと”にかかわるようになったという。自然に神様の言葉が聞こえてきて神様と話ができるという。「私はユタじゃない、ユタは下のお使いさ、私は神の女です」といい、自らはカミンチュだという。

②M氏（1948年生まれ）

氏は婦人会の会長、民生委員を務め、与那国の食文化のコンサルタントの仕事もしている。数年前から拌みやカウンセリングをしていたが、一昨年から自分でふんざりがついて、健康願いや、生まれ年願いや、葬式、焼香などを頼まれてやるようになった。「自信はないけれど神様にお願ひすると言葉が出てしまう。言葉が出てきたらお願ひする」という。氏を頼んだことがある島の人には「上手で自然にうつる。死んだ人がひっかかる」と評する。本人はムヌチであるといい、ユタとかそういうことではないという。

③Y氏（40～50代）

下の子供が小さいころから“知らせ”があったが、40代ちょっと前に本格的にこのような仕事を始めたという。本人はムヌチ、ニガイトであるという。仕事は神ごとと法事ごとが多い。神ごとでは道具を渡す人が神様のお使いとして下りてきて言葉を伝えるという。例えば、観音様の道具はお花なのでお花を持った人が降りてくるという。氏は沖縄（沖縄本島を指す）にも焼香や法事を頼まれていくことが多い。これは親を出身地である与那国のやり方で送りたいという家族がいるからだという。また、仏壇引っ越しにも（島外に出た家が仏壇を移動する）たのまれて一緒

に行くという。

島の人々によるとこういう人は線香を立てると次々と言葉が出るという。彼女たちは死者を送る言葉を習ったわけではないという。習わなくても自然に神さまが教えてくれるのだという。

しかし、“神ごと”をする女性たちすべてが死者を送る役目をするわけではない。“神ごと”をする女性で「神ごとと法事の両方はできない」という女性もいる。I氏は体調が悪くて長い間わずらい、何回かにかけて石垣・沖縄の3人のユタを訪ねた。「あなたは神ごとをする人です」と言われてから“神ごと”に携わった。彼女の場合は夢で教えられるといい、夢の中で予兆があるという。神様の声が聞こえ、姿も見えるという。しかし、「法事は汚れているから、そのまま神様を拝むのは怖い」という。与那国には“神ごと”と法事の両方をやっている人がいるが、何か怖い、私はできないという。「死んだ人の言葉を伝えるのは強い人が行かないと出し切れない」「亡くなって1年もたたないのに、しょっちゅうその家に行ったり来たりするのは（その家の葬式から焼香すべてを受け持つこと）こわいからできないんです」という。彼女は“ムヌチ”とユタはおなじですよと言ひ、自分は“神ごと”をやる人でユタではないという。

彼女たちは自分の事を、ムヌチ、ニガイト、カミンチュ、“神ごと”をやる人だという。しかし、島ではユタだという人もいる。これらの名称とその内容は時代と共に変化していると考えられるが、従来の報告を参考に一応これらの名称の整理をしておきたい。池間は、ユタは死後3日目にカン・カイシ（神招き）を行い死者の伝言を家族に伝えるもので、ムヌチは病人を扱う占い師であったという（池間 2007（1959 初版）：51）。杉島は「ムヌチは物知りが原義であり、しばしばユタと同義でもちいられるものの、儀礼的手順や祈願の言葉を知っているだけのものに適応される。ユタは祖先の意向を知り、マディムンなどの姿を見る能力を持つものであり、ムヌチとユタは対比される」（杉島 1980：38）という。赤田はユタ・モノニゲニン・モノシリ
の名称を報告し、葬儀にかかわる職能者はユタであり、その役割は死の直前直後の魂呼び、葬列の龕によりついた村人の霊落とすのために木の枝でガンを叩きながら進むこと⁷、葬儀の際の墓穴開きと墓穴閉じ、サンニチバガシ、ミーナンカハナシ、焼香であったという。モノニゲニンは資料を参考にして日取りをすることが中心で、家建て、墓建て、線香日、法事日、結婚の日などを占った。モノシリは、死の予兆、墓たて家たての日柄や向き、焼香の日取り、体の具合の悪い原因、物を失った場所などを占ったという（赤田 1983：73-78）。赤田の報告したモノニゲニンとモノシリは職能が一部重複していたが、資料に頼るのがモノニゲニンであり、モノシリは靈感と占いに頼ったのではないかと考えられる。原は、サニチイあるいはミナンカに行われるチイバガシ（魂別れ）に憑依して死者の言葉を伝える職能者をムヌチ（ユタ）、カンカイルトゥ（霊媒）と記し、ムヌチは葬式当日の墓開けと墓に棺を納める際、納めたあとの願いをすると報告している。これらの報告によると、ムヌチ・ユタ・カンカイルトゥは同一視されている。酒井正子は、葬儀で“拝む人”の事を「ドゥタ（ユタ）やムヌチ（物知り）ではない、ドゥタのように死霊をみることはないのだという」と記している（酒井 2005：155）。ユタやムヌチ以外に拝むだけの人もいたよう

である。米城によると、葬式の手配で「ドゥタムヌチ」、あるいは「ムヌチ」を依頼するとあるが、その役割については明記されていない（米城 2010：570）。

以上から与那国には人々の精神生活にかかわるさまざまな霊的職能者、あるいは職能者がいたことがわかる。かつては植松の記したように、ムヌチは儀礼的手順や祈願の言葉を知っているだけのもの、ユタは祖先の意向を知り（憑依）、マディムンなどの姿を見る能力を持つものであったと考えられるが、時代の推移でムヌチとユタが同一視されるようになってきたのであろう⁸。本論では、とりあえず現在の与那国の葬儀において死者を送る霊的職能者を“ムヌチ”と記す。

2 与那国の葬儀と“死者を送る人々”（ムヌチ）

与那国の葬儀は島人の互助組織（班が基本となるが、かつて協力してもらった家では同じ班でなくても協力する）で行われる。集まった人々は料理はもちろんの事、さまざまな仕事を役割分担してこなす。造花などの作り物は器用な人が、旗や布に字を書く役割は達筆な人が毎回その任に当たる。葬儀全体を指図する人はウツタイトといい親族の年長者がなる。葬儀に際して昔は牛や豚を潰して人々にふるまったというが今は冷凍肉を使う。

与那国の葬送については前述したように原が詳細に報告しているので、本論では 2012 年に筆者の拝見した M 家の葬儀の流れに沿って“ムヌチ”の役割をみていきたい。なお、“ムヌチ”の役割を記す際、“ムヌチ”の行動の背景となる与那国の死に関する民俗伝承もあわせて記す（これらは後に“ムヌチ”たちからお聞きしたものである）。

筆者は“ムヌチ”である Y 氏と M 氏に了解を得て、準備から同行させていただいた。また、喪家に挨拶し造花作りの手伝いをしながら葬儀を拝見した。しかし、よそ者である筆者が拝見するには限界がある。拝見できなかったところは、親族の方々や“ムヌチ”たちにお聞きして記した。特に、M 家の葬儀における“ムヌチ”の行動については、再調査の折に詳しく本人たちからお聞きした。また、葬送に関する先学の論著を参照した。

（1）葬儀の経過

昔は亡くなった時に女の人が黒い着物をかぶって「あはれどうー」と大声を上げて庭を東西に走ったという。しかし、今ではそのような光景は見られない。与那国には診療所はあるが、病気が重くなるとヘリコプターで病人を那覇の病院へ送る。病院で亡くなるのをタビでなくなるという、タビでなくなるとその地で火葬する。そのため、遺体の沐浴、死衣装の着付けなどの遺体に対する処置は喪家では行われなくなった。しかし、自分の家で葬式をしてあの世に送られてこそ成仏するといわれているので、タビで亡くなった人は島に帰って必ず 1 度は家に入れる。家に連れ帰って死者を安心させて、「この家から葬式しますからあの世に行って成仏するんですよ」と言葉をかけるという⁹。

死亡の知らせを受けると、喪家では留守番のものが近所や親戚の協力を得て葬式の準備を始める。今回葬式を担当する“ムヌチ”は喪家の親戚にあたる Y 氏であったが、氏は那覇に行く予定

があったので途中からM氏に代わった。葬儀を拝見したM家では当主がまだ60代はじめて亡くなったため悲しみに包まれた葬儀であった。以下、M家の葬儀の流れを記す。

通夜の前々日（死者の帰宅の前日）

昼、残っている家族による喪家の掃除、及び近所の人たちによって葬式をやりやすいように喪家の入り口・廊下などの邪魔なものを取り除く作業が行われた。

夜8時過ぎに、Y氏とその娘、故人の姉が先祖に捧げる御願用白紙とウチカビのセットを準備した。これは喪家の祖先（33年忌をしていない死者）と墓地の地の神であるジーチガナシ（土地御神加那志）に捧げるお金であり、このセットを墓場での儀礼の際、墓の脇で燃やす。今回は葬式・三日焼香・初七日の分を作った。今では葬式の日これらの儀礼も行ってしまうのである。

通夜の前日

家の前の道路にはテントが張られ、テント付近では手伝いの男性たちが給食用の回転鍋を使って豚の三枚肉と昆布でソバの汁を作っていた。手伝いの女性たちは家の中で調理を担当する。これらの料理は手伝いの人と喪家の食事となる。

まず、一番座の柱時計・家族の写真・仏壇の位牌に白い細長い紙が斜めに貼られる。庭に大きな台が置かれ、花作りの担当者が中心となって花などの“作り物”の準備が始められる。本当は葬式の前日からこれらの作業を始めるのだが、明日は友引なのでこの日から始めたという。白・金・銀の紙を切ってハスの花を作る。「きれいに花を作ると次の葬式が近い」といわれている。骨壺は龕に直接入れないのでベニヤ板で骨壺を入れる箱も作る。昔はこのような葬式の準備は高齢者だけによって行われ、若い人はそのそばにも近づかなかったという。このような作り物は“葬儀屋の真似ごと”だと評する人もいる。

この日に葬式の際の男性の役割分担（誰が龕を担ぐかなど）を決める。さらにトウツルモドキ（方言名はイトウ、イト）でイトという輪を作った。不慮の死で家に帰るときに遺体をこの輪に通すというのが最近はあまり行われな。故人の叔母であるU氏が若くしてタビで亡くなった甥を憐れんで作るようにいったという。葬式では年寄りの発言が大きな力を持つ。

通夜（遺骨が帰る）

朝8時に集合。テントでは男性たちが調理を始めていた。肉を切りバーナーであぶる、刺身を作る、回転鍋でそばの汁を作るなどの作業である。テントには手伝いの記録を付ける男性がいる。テントの反対側では約40本の竹を洗ったり節を切ったりしていた。これらの竹は旗（四つ旗、墓地旗・弔旗）に使われるものである。旗は葬列と共に墓に運ばれ四十九日に燃やされる。

“ムヌチ”であるY氏は仏壇の前に座り、ご先祖に「遺骨が飛行機に乗って家に帰ってきます」と報告する。このような報告を“案内する”という。“ムヌチ”が新しい死者の到着を事前に報告するのは、あの世の親戚たちにも死者を迎える準備をしてもらうためだという。案内が終わっ

たあと Y 氏が指図して仮祭壇を一番座に作る。手伝いの男性が仮祭壇の前の畳を入り口に向かって縦に並べ替えた。後にここに死者のための布団が敷かれることになる。

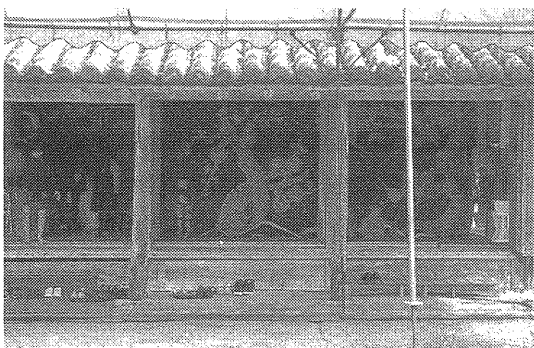
“ムヌチ”の指示によって遺族が盛花を部屋の周りに並べる。“ムヌチ”は遺族に「仮祭壇と仏壇の線香を絶やさなよう」と注意をする。仮祭壇の上には手作りの花と香炉、線香、お茶、水、重箱に入った米、位牌などが後に置かれる。一番座には紅型（沖縄の伝統的な染色技法）の幕が張り巡らされる。遺族はこの幕の中で死者と対面することになる。この日は墓掃除をするのだが、友引なので手伝いの男性たちが墓掃除を嫌がった。そこで、“ムヌチ”の指示によって墓の草取りだけを行うことにした。

朝の航空便の到着する時間が近づくと親族は空港に迎えに行く。空港では黒い傘を半開きにして遺骨を持つ人にさしかける。自宅の門のところで遺骨を持って帰ってきた長男がイットの輪をくぐる。二人の男性が輪の両脇を支えて持ち、輪を回して長男を何回かくぐらせた。叔母の U 氏によると、これは浄めであり、門の神様にこのようなことが二度とないうようにと願う意味で行ったという¹⁰（このイットの輪くぐりについては別稿で扱うので詳細は略する）。そのあと一緒に帰って来た家族や東京・那覇・石垣などからやってきた親戚（故人の兄弟・子供・孫・子供の連れ合い・連れ合いの両親）が家に入る。

仮祭壇の前に薄い布団が敷かれ骨箱が置かれ、さらに亡くなった人の着物が上に掛けられる。このとき、“ムヌチ”は線香をあげながら、死者の亡くなった理由を述べ、「連れて帰りましたから、おうちの中で時間が来るまでゆっくりしてください」という内容の言葉を死者にかける。このような“ムヌチ”の言葉は主に与那国の言葉で行われる。女性の歌声がかすかに聞こえ、やがて慟哭が始まった。



仏壇の前で報告する M 氏。左の卓が仮祭壇となる



部屋を囲う紅型の幕



イットの輪をくぐる遺骨を持った長男

夕方、“ムヌチ”は明日の必需品について家族と打ち合わせをする。墓地に入れるお酒・草履・お米とあの世へのお土産として入れるお茶などの買い物を家族に指示した。

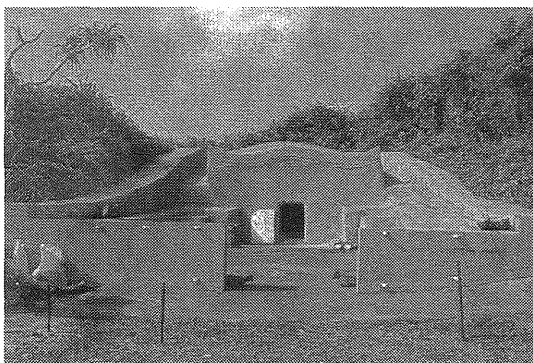
夜の7時過ぎ頃から三線の音が鳴り、家の中からトゥバルマやミラヌウタが聞こえてきた。ぼつぼつと弔問客がやってきて挨拶を述べ幕の中に入るが長居せずにはすぐ帰る。外ではテントの中で親族の男性たちが酒を飲んでいる。通夜には猫が死体をまたがないように一晩中起きているのだという。故人の友人がデンサー節、トゥバラマ、ミラヌウタなどサンシンで弾いていたが、あまり泣かれるのでつらくて10時頃には帰ったという。後に故人の弟が故人が好きだった小林明の歌を数曲歌ったという。

出棺・野辺の送り・納骨

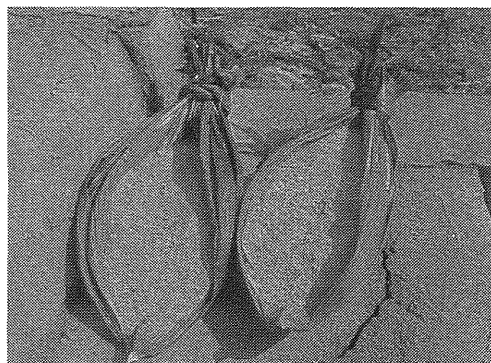
朝8時前から準備が始まる。庭で“作り物”を作り、外のテントでは調理を担当する男性たちが昆布と豚肉を回転鍋で煮たり刺身を作ったりしている。

この日に墓の口を開ける。墓の口開けは朝の引き潮の時（午前10時頃）に行なわれた。最初にY氏が墓地のジーチガナシに「〇〇が亡くなったので墓に入れるから起きてください」と3回いってジーチガナシを起こす。突然死者を連れて行っては失礼であり、それなりの札を尽くして快く死者を迎えてもらうためだという。墓の口を開けるに際してはカードの人（生まれ年の干支などで決める）が後ろを向いて墓を1・2・3と3回叩いてから開ける。これは「墓を開けますよ」という合図である。ジーチガナシと墓の先祖に供物を供え、線香を立てて墓の願いをする。墓の入り口や墓の口、子（ネ）の方角などに砂を盛ったクバの葉が合計9つ置かれる。これらの場所ではそれぞれの神（ジーチガナシ、屋根の神、タチ神、門の神、子の神）がいる場所である。クバの葉は線香立て（香炉）のかわりであり、邪気が入らないようにするためだという。“ムヌチ”は墓の神、先祖たちに「〇〇がああの世に行くから迎えてください」「前もって知らせますから仲良くしてください」という内容の言葉を告げる。

この日は家で死者にご飯を7回供える。「今は1回目です」「これは2回目です」と“ムヌチ”が声をかけてご飯を供える。三途の川を渡るときにはお腹がすくのでこのご飯を食べていって



墓の口開け後のM家の墓地



クバの葉の線香立て

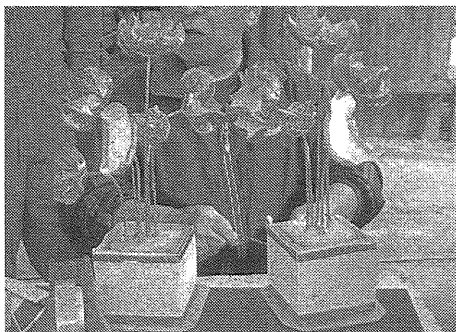
ださいという意味である¹¹。

“作りもの”の担当は昼までに花・笠・下駄・杖・前卓・位牌を完成させる。板に白い紙を貼って位牌を二つ作り、文字の担当の者が筆で「帰元男〇〇之霊」(表)「平成24年〇月〇日 享年〇才」(裏)と書く。位牌には戒名ではなく俗名、つまり本人の名前を書く。戒名のある場合は戒名も裏に書くが、与那国では戒名は重要視されていない。死者の顔に掛けるチラスアアディ(今回は骨箱にかける)や旗(四つ旗、墓地旗・弔旗など)の文字もすべて担当の者が書く。チラスアアディの中央には「南無文殊菩薩 南無本師釈迦牟尼大覚世尊 南無普賢菩薩」と書きその両側にも文字を書く。チラスアアディを被せる理由は「与那国にはお坊さんがいないからお経のかわりにやっている」といわれ、「よそこにもどこにもいかんでまっすぐグズまで行きなさい」という意味があるという¹²(原2000:115)。墓地旗には「釈迦如来楞 為衆告命南天竺 憶年弥陀仏本願 自然即時入必定」と書く。僧侶がいない葬儀といえども仏教色は強い。“作り物”が完成したら、これら“作りもの”に携わった人々には酒と三枚肉と昆布の包んだものがお浄めとしてふるまわれる。

やがて龕が庭に運ばれてくる。二番座の前に焼香用の卓が置かれ、しだいに弔問客がやってくる。弔問客は香典をだして焼香し、杯に酒を注いでもらい飲み干し、香典返しを受け取る。

出棺前(午後3時頃)に家族・親戚と死者の最後の別れである“水の別れ”が行われた¹³。(以下、二人の親族、故人の叔母のU氏、この時“ムヌチ”だったM氏にお聞きしたことを述べる)。仮祭壇の前の布団に骨箱を置き、その上にチラスアアディを掛け、さらにその上に着物をかけたが、その様子はまるで死者が寝ているようだったという。U氏が手に塩水を付け遺骨の入った箱の方を撫ぜ、「あと何もないようにお別れしましょうね」といいながら遺族の額を撫ぜてひとりひとりに最後の別れをさせた。遺族たちは線香をあげて、「ゆっくりしてねー」「しかたがないよ」「向こうでみまもってちょうだいね」「思い残すことはないよー、まっすぐいきなさいよー」などと別れの言葉をかける。死者に声をかけることは情けをかけることだといわれていて、できるだけ声をかけてあげるといいという¹⁴。

“水の別れ”では死者の“あの世に行く歌”も歌った。“あの世に行く歌”とはミラスウタヤト



完成したハスの花の“作りもの”



墓地旗の文字を書く

ウバラマの曲調にあわせて、「うぶとうはるふにや しまいぎどう、むどうるぬはるたとうふにや またんかいしならぬ（大海を走る船は島に戻ってくる 野原立つ船は再び帰ってこない（ミラヌウタ）」（宮良 2007:87）、「大渡はる舟やまたん見らりん、大野はる舟やまたどう見らるぬ（トウバラマ）」（大田 2012:168）などと歌うものであり¹⁵、死者を船（あるいは舟）に乗ってあの世に行くものと表現している。事前に報告を受けたあの世の親戚たちはあの世の棧橋で「まだかい、まだかい」と待っていて、これらの歌がきこえてきたら「もう来た、来た」といって棧橋で死者に手をかしてくれるのだという。

“ムヌチ”は故人が思い残すことがないように故人の最後の思いを周りの人々に伝えた。このとき叔母のU氏が上手に受け答えをしてくれたので、M氏はやりやすかったという。“ムヌチ”の伝える死者の言葉に対して、「ちゃんとしていくんだよ」「未練残すなよ、仕方ないんだよ、病気で行くから」「お父さん、お母さんみんな迎えに来てくれるからまっすぐいきなさいよ。振り向かないで、あんたはあんたの世界にいつているから振り向くなよ、守りなさいよ」などとU氏が答えてくれたという。さらに、“ムヌチ”は故人の力を残った人にあげるようにとねがった。出棺の時間が近づくと、「お父さん行くよー、おうちから出るんだよー」などと言葉がかけられた。

龕に遺骨の入った箱を入れて出棺となった。出棺時に葬儀を采配した人が、「ぐすんきぬあいていや、まーまんかどうひるどお（後生への道はまっすぐ行くんですよ）」と故人に言葉をかけた。門の外には喪服姿の人々が並んでいた。叔母のU氏が家の中でミラヌウタやトウバラマを歌って龕を見送った。

葬列では、旗、前卓を持つ長男、花かごを持った孫たち、龕、頭に白い布を被った女性たちなどが並び、その両脇を白い布が覆い、墓地まで静かに進んで行った¹⁶。

墓地の周囲に旗を置き、龕を墓場に運び入れてから骨箱を出す。墓前に酒・お茶・神米・木花・白餅・豚肉・豆腐・カマボコを供える。“ムヌチ”はジーチガナシと先祖に死者の死因を述べ、「〇〇が来ましたからみんなと一緒に迎えてください」「先祖様両親も一緒に迎えてください」などと願う。“ムヌチ”が押んだ後、骨壺やお土産を墓の口の中に入れる。「合掌してください」という言葉で外にいた会葬者も手を合わせる。さらに、“ムヌチ”



墓地へ向かう葬列



墓地に着いた会葬者たち

は「墓に納めたから安心して成仏してください。あの世には父も母も先祖様もいらっしゃるからゆっくりしていろんな話をしてください。あなたはもうあの世の人になったのだから、あの世の人として焼香しますから成仏して極楽に行ってください」と声をかける¹⁷。最後に“ムヌチ”は、「まぢるにやぶうるすうどうみきいわいべえ、うやしわいていぬうぐあふすぐ、くうぐあふすぐんでい、たたいさばいみぬんけえ、かんどうりとうきいわりよ（まつるごとにすべてを子細に吟味されてお召し上がりください。あれが不足これが不足ということで障りを及ぼすことなく神になってください）」（米城 2010：561）と願う。“ムヌチ”の願いがすむと、遺族の代表として故人の長男の挨拶があった。



墓の中に棺を入れた後の祈り
（椅子に座っているのが“ムヌチ”）

さらに三日焼香・初七日もこの日に行なってしまう。“ムヌチ”は「今日の葬儀は終わりましたがまた受け取ってください」といってさらに供物をささげる。“ムヌチ”が中心になって故人の家族と一緒に再び拝む。墓の脇では供物の紙が燃やされる。拝みが終わると供物とお酒を墓の外の人たちに回す。さらに、会葬者ひとりひとりに肉とコブを包んだ包みを渡す。みんなが帰った後、専門の人が漆喰を墓の入り口の周辺に塗って墓口を閉じる。帰宅後、“ムヌチ”は仮祭壇に向かって本人に納骨した旨を伝え、仏壇に向かって「先祖様といるから見守ってください」と願った。

（2）葬式後の儀礼

以下、葬式後の儀礼について簡単に述べる。亡くなって（あるいは葬式の日から）から7日までは毎日朝夕傘をさして墓参りに行く。墓参りに行くと墓でトントンと音がするので開けたら生きていたということがあったので、生死を確かめるためにも1週間は毎日墓に行くといわれる。死後（あるいは葬式の日から）3日目に三日焼香（サニチイ）が行われる。三日焼香は墓に行ってジーチガナシに三日焼香の報告をして重箱を供える。初七日から四十九日まで7日ごとに仏壇に供物を飾り法事を行う。しかし、今ではM家のように三日焼香、初七日を葬式の日と同時にやってしまうことが多い。

さらに四十九日までの間に日を選んでチイバガシがおこなわれる。これは親族近親者が死霊に取りつかれていると考えられているので初七日を迎える前に日を選んで行われる。チイバガシには“ムヌチ”が死者の言葉を伝える。そして、「いつまでもお父さんの事思っていたら仕事できないから別れさせてくださいよ。ちゃんとしてあげるから心配しないでください」などと“ムヌチ”が死者に言い聞かせて別れをさせる。“ムヌチ”は遺族にブー（苧麻）で作った輪を首や手

にかけさせるが、これは生きているものの魔除けである。このように、“ムヌチ”は死者の言葉を伝えるだけでなく魔除けの行為もした。

サガイはミナンカまでに日を選んで行われる。「サガイが大事」といわれ、この日は死者をあ
の世の帳簿（戸籍）に載せる日であり、焼香の始まりであるといわれる。墓の前で畑の絵を書い
て、「あの世に行っても畑を作って食べなさい、こっちはあんたのもの、こっちは生きている人
のもの」といって財産をわける。これらは“ムヌチ”が言葉でいうが、かつては喪主あるいは親
戚の長老が行った。サガイが終わると、「サガイも無事に済みました」といって、グスガナシ（あ
の世の神）に紙のお金を供え、門、道の神様にもお礼をする。

四十九日は真夜中の焼香（ドゥナカマチ）といわれ、2日間にかけて行われる。この日から死
者は仏壇に載せられる。前日に墓に行き、ジヌカン、グスガナシなどに紙のお金を捧げ、「焼
香なので迎えに来ます」と報告する。夜、松明を家の前で燃やして合図をして死者を迎える。翌
日、12番といって12回お膳を出す。四十九日はサトウキビを切ってシュロでまとめて山の実を
挿して飾る。鶏を潰して丸ごと茹でて羽をとり両羽を広げて飛んでいるように飾る。これはトウ
ビドゥヤ（飛ぶ鳥）と呼ばれ、「こんな立派に焼香しています」と天の宮に報告する役目を担っ
ているといわれる（米城 2010：609）。O氏は「あの世は酉の方向になるので、三途の川を渡っ
て酉の方向に飛んでいきなさい」という意味で鳥を飾るという。

O氏によると、“チイバガシ”や四十九日、あるいはサガイの別れの儀礼では仮祭壇の下にミ
ズヌクの入ったどんぶりを置く。ミズヌクはなすびの切ったものと炒った種物などを片栗粉を溶
いた水に入れて作る。葬式やサガイには“あの世の乞食みたいなもの”が出てきて道でおろおろ
していて「私にもごちそうを頂戴」とすがってくるので、“ムヌチ”が「あんたなんかいら
ない」といってミズヌクをパツパツとちらして止めるという。片栗粉がついているのでミズヌクはぱっ
ととまる。これは“あの世の乞食みたいなもの”から死者を守るための祓いの行為である。

サガイや四十九日の“ムヌチ”の役割は、死者の言葉を遺族に伝え、グスガナシ・先祖・遺族
と死者の仲介、死者の慰撫と言い聞かせ、魔除けや祓いの行為であった。サガイ・四十九日・百
日・1年半・3年・7年・13年・25年・33年と計9回の焼香を行うが、これをクブンという。こ
れらの焼香もムヌチが担当する。7年後に行われる洗骨も“ムヌチ”が行う。

3 “ムヌチ”の役割とその存在

葬儀における“ムヌチ”の役割についてまとめ、なぜ今でも僧侶ではなく“ムヌチ”に葬儀を
たのむのかについて考えたい。さらに、“ムヌチ”の役割を八重山のネンプチャーと比較検討して、
その役割はどのような死後の世界観に基づいているのかを考えたい。さらに、“鳥で死者を送る”
という視点から“ムヌチ”の存在について考えたい。

表「M家の葬儀におけるムヌチの役割」

日	時間	ムヌチの主な行為	内容
通夜の 前々日	夜	墓で焚く紙のお金のセットを作る。	墓地の神・先祖との仲介の準備
通夜の 前日		とくにない	
通夜	朝	喪家の仏壇の前で先祖に遺骨の到着を報告する。仮祭壇を作らせ線香の指図をする。	先祖と死者の仲介 遺族への指図
	遺骨の 到着	線香をあげながら遺骨に話しかける。	死者の慰撫
	夕方	墓に入れる土産などの買い物の指図をする。	遺族への指図
	通夜	とくにない	
葬式	朝 10 時 頃	墓の口開け（クバの葉に砂を入れて香炉を作り、土地神と墓の先祖などに願いをする）	墓の神々や先祖との仲介、墓地の魔除け
	出棺前 の“水の 別れ”	死者の伝えたいことがあったら遺族に伝える。死者を慰撫し、死者に死を納得させる言葉をかける	死者の思いを伝える、死者の慰撫 と言ひ聞かせ
	墓地	骨を墓の中に入れるときに指図をする。墓の中に骨を入れた後、中心になって願いをを行う。	遺族への指示、墓の神々・先祖との仲介、死者へ言ひ聞かせ
	帰宅し てから	仮祭壇と仏壇に向かって納骨したことを告げ、先祖に死者を見守ってくださいとねがう。	死者へ言ひ聞かせ 先祖との仲介

(1) 葬儀における“ムヌチ”の役割

大勢の人々が手伝う葬儀であるが、遺骨の安置される一番座には遺族と“ムヌチ”以外は出入りしない。弔問客は別として手伝いの者が一番座に入ることはない。手伝いの人々は死者にかかわる作業の一切を“ムヌチ”に任しているし、手伝うとしてもその行動は“ムヌチ”の指図のもとに行われている。

では、葬儀において“ムヌチ”はどのような役割を果たすのだろうか。本論で報告した葬儀の事例から、“ムヌチ”の行った行為について表「M家の葬儀における“ムヌチ”の役割」にまとめてみた。この表によると“ムヌチ”の役割は、①仲介（墓地の神々やあの世の神などと死者の仲介・先祖と死者の仲介・死者と遺族の仲介）、②死者の慰撫と死者への言ひ聞かせ、③死者の思いを遺族に伝える、④魔除けの行為、⑤遺族への指図、である。葬儀における魔除けや祓いの行為は現在では墓地の口開けの儀礼にしかみられないが、かつては葬儀で“ムヌチ”による魔除けや祓いの行為がいくつか行なわれていたと考えられる¹⁸。葬儀後の様々な儀礼や焼香にも“ムヌチ”はかかわる。サガイや四十九日の“ムヌチ”の役割は、神々・先祖・遺族と死者の仲介、死者の慰撫、そして魔除けや祓いの行為であった。

なお、“ムヌチ”の遺族への指図(⑤)という役割は近年の事ではないかと考えられる。この役割は昔は身内の年配者が行っていたものであろう。墓に入れる死者の土産などは昔は身内の年寄りが自発的に持ち寄ったものであろう。昔からのしきたりを知る人が減ってきたので、“ムヌチ”が葬儀に際しての指図もするようになったのであろう。島の葬儀の変化に伴って“ムヌチ”の葬儀における役割はますます重要になってきている。

しかし、葬儀において“ムヌチ”のかかわらない儀礼、あるいは“ムヌチ”が中心にならない儀礼がある。“ムヌチ”は通夜にはかかわらない。水の別れでは“ムヌチ”は死者の言葉を伝えるが、実際に遺族と死者との別れを行ったのは親族の年寄りのU氏であった。“ムヌチ”のM氏は「今回の葬式は身内でできる人がいたのでよかった。故人の叔母のU氏は靈感のとれる人だ」とU氏を評した。後にU氏にこのことを尋ねたところ、「自分には靈感はないけれど、若くして亡くなった甥がかわいそうで思ったことを口に出しただけ」という。酒井卯作が述べたように、かつては与那国でも“ムヌチ”ではなくU氏のような身内の年寄りたちが死者を送る役目を担っていたのであろう。

(2) 僧侶ではなく“ムヌチ”に頼む理由

与那国で葬送を僧侶ではなく“ムヌチ”に頼む理由としては、遠い島なので僧侶を呼ぶのが大変という理由もあるが単にそれだけではない。今でも島で死者を送るに際して“ムヌチ”のような島の霊的職能者に頼むのにはいくつかの理由がある。

与那国島では葬儀でも島の言葉が重要視される。“ムヌチ”のネガイの言葉は主に方言で声に出して行われる。“ムヌチ”のM氏は「私は方言ができるからならわなくても言葉が出てくる」という。“ムヌチ”にとって方言で死者に語りかけること、方言で死者の言葉を伝えることは重要なことだという。“ムヌチ”のO氏は「与那国の葬式には坊さんはいらぬ。お金ある人は坊さん連れてくるが、坊さんは与那国の言葉わからないでしょ。浄めるだけよ」という。“ムヌチ”は単に願うだけではなくさまざまな仲介役もする。すでにみたように与那国の葬儀は死者・遺族・先祖・神々との間のコミュニケーションからなる。与那国の言葉で語らなければ意味がないのである。

僧侶の読経は死者・遺族・先祖・神々との間のコミュニケーションから成り立つものではない。また、読経の内容も理解しやすいものではない。M氏は僧侶の読経に参列したことがあるというが、遺族はお経の意味が分からないので泣かなかったという。また、僧侶は戒名で故人を呼ぶが、与那国の人々は戒名の呼び方に慣れていないし、死者も戒名で呼びかけられては自分の事だとはわからないといわれる。

さらにO氏は「坊さんは島のしきたり知らないでしょ。島のしきたりわからないと葬式できないよ」という。“ムヌチ”の行為や願いの言葉の背景には、すでにみてきたように与那国の死に関する民俗伝承がある。そして、この民俗伝承は“ムヌチ”と島の人々によって共有されている。僧侶はこのような島の死に関する民俗伝承を共有することはない。

(3) “ムヌチ”の役割の考察—八重山のネンプチャーとの比較から

前述した“ムヌチ”の役割は与那国独自のものなのだろうか。ここでは与那国の“死者を送る人々”の役割について八重山のネンプチャーの役割と比較検討したい。

“死者を送る人々”として王府時代から沖縄地方にはネンプチャーと呼ばれる人々がいた。ネンプチャーは葬儀に際して喪家に呼ばれ、鉦を叩きときおり死者にあの世の事を語りかけたという(佐喜真 1925: 95-96)。八重山地方にもネンプチャーが存在した。石垣島各字の伝承ではほとんど各字に一人ずつ念仏者がいた。各字のネンプチャーは人頭税、公事が免除されていた。葬式に参加する報酬としては多くの場合各字所有の念仏田を耕作しその収穫物を得た。念仏田は殆ど旱害のない良い位置にあったという。大浜村では大正のころ、念仏者に対し報酬として50円を支給していたという(新城 1972: 202 - 203)。八重山のネンプチャー(以下、ネンプチャーとのみ記す)が集落の公的な存在であったことがわかる。

筆者の調査によると石垣島以外の島々にもネンプチャーが存在した。彼らも島の公的な存在であり、葬式・洗骨・33回忌などにかかわった。波照間島では公民館がネンプチャー(サイシと呼ばれていた)を選びその報酬を払った。ネンプチャーは世襲ではなく、その人物を考慮して選ばれた。『写真集 波照間—祭祀の空間』には、野原家の墓掃除の際に供物の前で手を合わせて願うサイシ(ネンプチャー)の姿が掲載されている(写真番号218)。これはアウエハント夫妻によって1965年に撮影されたものである。同島では、「今はサイシがいらないから波照間では葬式ができない」といわれるが、ネンプチャーは単に鉦を叩き“念仏”を唱えるだけではなく、死者をグショーに送るという役割を果たしていた。具体的には、鉦を叩き念仏を唱えること、入棺時と墓を閉めた後に死者にグショーの道について語りかけること、墓地で土の神に願いをすることであった(古谷野 2011: 107)。ネンプチャーは神がかりする人ではなかった。死者の言葉を聞くのは葬儀後に行われる焼香の際、身内の年寄りや別の職能者によって行われた。与那国にはネンプチャーはいない。筆者は拙稿「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容 - 波照間島のサイシの事例を中心に -」で、八重山諸島の島々(桃林寺のある石垣島を除く)におけるネンプチャー受容の理由の一つとして、近代国家における“見せる葬儀”の奨励をあげた。明治政府の戦死者の葬儀の奨励が親族のみで行われていた葬儀を一般会葬者を含む“みせる葬儀”に変え、それまで行われていた女性たちの号泣や哭き歌は見苦しいとって廃止されネンプチャーが受容されたと考えられることを述べた。女性たちの号泣や歌と比べてネンプチャーの叩く鉦は見苦しくないと判断されたのであろう。しかし、与那国ではネンプチャーの存在を筆者は聞かない。おそらく、与那国の人々は鉦と念仏で死者を送ることよりも、哭き歌で死者を送り続けることを選んだのであろう。

しかし、与那国の“ムヌチ”と八重山のネンプチャーという八重山の“死者を送る人々”の役割を比較すると、ネンプチャーは“ムヌチ”のように死者の思いを伝える(③)行為は行わないが、墓の神・あの世の神・先祖と死者の仲介(①)死者の慰撫と死者への言い聞かせ(②)、魔除けや祓いの行為(④)は共通している。

ではなぜ“ムヌチ”や八重山のネンブチャーは①②④のような役割を担うのか。それは、出棺の際に最後に死者にかけられる「ぐすんきぬあいていや、まーまんかどうひるとお（後生への道はまっすぐ行くんですよ）」という言葉に表れている。これらの行為は死者を後生へまっすぐ行かせるために行われるのである。自分の死を納得し、すがりつく“あの世の乞食みたいなもの”から守られ、墓やあの世の神々や先祖たちに報告してもらわなければ、死者はまっすぐにあの世に行くことはできないと人々は考えていたのである。そのために、“ムヌチ”のような霊的職能者や、鉦をたたき念仏をとこなえるネンブチャーのような“死者を送る人々”の存在が必要とされたのである。

（４）島で死者を送る

ここでは島で死者を送るという視点から“ムヌチ”の存在について考えてみたい。

“ムヌチ”は死者がどういう思いでいるかがわかるのでそれを遺族に伝える。“ムヌチ”は、死んだ人がのりうつると体が震えるという。ある島の人々はM氏の事を「拝みながら震える。立つてもすわっても震える。本人は何をいったのかわからない。死んだ人の言葉を伝えるだけ」という。この役割は葬式後、七日ごとの法事やサガイにおいてもおこなわれる。M氏によると、死者の言葉はナンカナンカ（7日ごと）で変わっていくという。出棺前の“水の別れ”の時は、突然の死に際して死者の言葉は悲痛であり、家族それぞれに事情もあり伝えるのがつらいこともあるという。何回かの儀礼の後には家族も落ち着いてくる。すると、死者の言葉も落ち着いてくるという。O氏の経験では、死者が「煙草吸いたいんだけど、たばこ1本もないので酒ばかり飲んでるよ」というので、すぐに家族に煙草を持ってこさせたことがあったという。そうすると死者が煙草を吸ってにこにこしているのが見えたという。おそらく死者は生前から煙草が好きだった人でO氏もそれを知っていたのかもしれない。確かに彼女たちは“見える人”であり死者がのりうつる人であるかもしれない。しかし、彼女たちが与那国という小さな共同体に属していて情報を共有しているからこそ伝えられることもあるのである。

前述したが、“ムヌチ”の行為や願いの言葉の背景には与那国の死に関する民俗伝承がある。そして、この民俗伝承は“ムヌチ”と島の人々によって共有されている。“ムヌチ”は島という共同体の中においてのみ死者を送りえる霊的職能者なのである。与那国の人々は今でも自分の生まれ島で生まれ島のやり方であの世に送られたいと願っている（もちろんどの島の人々も同じ願いを持ってはいるのだが…）。そのために“ムヌチ”のような存在が必要なのである。Y氏が那覇に仕事で行くのは、たとえ故郷を離れていても生まれ島のやり方であの世に送られたい、送ってあげたいと願う人々がいるからである。

4. まとめとして

本論は沖縄県八重山諸島与那国島の葬儀に際して“死者を送る人々”とその役割について論じたものである。与那国島では今でも僧侶を頼まず、島の霊的職能者が葬儀において死者を送る役

目を果たしている。本論ではこの霊的職能者を“ムヌチ”と記す。島の葬儀の事例から“ムヌチ”の役割を大きくまとめると、仲介（墓地の神々やあの世の神・先祖・遺族などと死者の仲介）、死者の慰撫と死者への言い聞かせ、死者の思いを遺族に伝える、魔除けと祓いの行為、遺族への指図である（なお、遺族への指図は近年の事と考えられる）。

つまり、与那国の葬儀は死者・遺族・先祖・神々との間のコミュニケーションからなる。与那国の言葉で語らなければ意味がない。僧侶の言葉は与那国の言葉ではないし、読経はそのようなコミュニケーションからなるものではない。また、“ムヌチ”の行為や願いの言葉の背景には島の人々と共有している与那国の死に関する民俗伝承があるが、僧侶はこのような民俗伝承を共有することはない。与那国が遠隔の地であり僧侶を招くのが大変だったという理由以外に、上記のような理由で人々は今でも僧侶ではなく“ムヌチ”に葬儀を依頼している。

八重山諸島の他の島々には“死者を送る人々”としてネンプチャーが存在した。“ムヌチ”とネンプチャーの役割を比較すると、仲介、死者の慰撫と死者への言い聞かせ、魔除けと祓いの行為など共通する点が多い。これらの行為は、死者をあの世へまっすぐ行かせるために行われる。自分の死を納得し、すがりつく“あの世の乞食みたいなもの”から守られ、墓やあの世の神々や先祖たちに報告してもらわなければ、死者はまっすぐにあの世に行くことはできないと考えられているからである。そのために、“ムヌチ”のような霊的職能者や、鉦をたたき念仏をとなえるネンプチャーのような“死者を送る人々”の存在が必要とされたのである。

“ムヌチ”の役割は島の共同体と密接に結びついていて、島の葬儀においてのみ死者を送る霊的職能者である。与那国の人々は自分の生まれ島で生まれ島のやり方であの世に送られたいと願っている。そのために“ムヌチ”のような存在が今でも必要とされているのである。

しかし、本論は“死者を送る人々”である“ムヌチ”の役割の分析と位置づけに終わり、“ムヌチ”や島の人々の持つ死後の世界観などについては十分に論じることができなかった。今後の課題である。また、沖縄の他地域の“死者を送る人々”についても調査・考察を続けたい。

註

- ¹ 経巾の習俗は八重山諸島のみではなくかつては沖縄一帯で行われていた。（古谷野 2012：34 - 35）。
- ² 戦後の1時期、台湾から引き揚げてきた浄土真宗の僧侶・亀井良種が葬式を行ったこともあったが、亀井の帰郷後島には僧侶はいない（米城 2010：593）。
- ³ 『与那国町史 民俗編』の編集後記（米城 恵担当）による。
- ⁴ 『与那国町史 民俗編』の編集後記（米城 恵担当）による。
- ⁵ 死者に声をかけながら泣くのが得意な人もいた。こんな話がある。キビ刈りの時に「あなたは泣くのが上手だから自分の葬式でも泣いてくれよ」といわれた人がその人の葬儀で「一緒にキビ刈りした時は元気だったのにー」と泣きながら上手に死者に声をかけたという。しかし、このように上手な人は現在1名しかいないという。また、葬送歌をうたえる人も今では数える

ほどしかない。哭き歌で送る与那国の葬儀もしだいに変わりつつあるといえよう。

- ⁶ 彼女たちは筆者に対して忙しいにも関わらず時間をさいてくださり、筆者のぶしつけな質問にも快く答えてくださった。
- ⁷ 波照間島でも葬列に際してはワルモノが生きている人や亡くなった人に悪さをすると考えていて、葬列ではお米や塩を撒いたという。「ワルモノは乞食だから美味しいものがあると拾う」「お米を投げて通るとね、あれは細かいですよ。数が多いから、あれを拾っているうちに行列は無事に通る」という。龕の前の龍頭はワルモノが死んだ者に悪さをしないようにと付けるといふ。葬列で号泣しながら歩きつづけるのも、龕の近くで叩かれる鉦の音と念仏もワルモノに対する防御行為であったと考えられる（古谷野 2011：104）。
- ⁸ 実際は何をもってユタとするかも明確なものではなく、時代や地域、さらに人によってもその定義は異なる。しかし、本論は現在の与那国島の”神ごと”を行う女性たちがユタかユタでないのかを論じているのではないので、これ以上は論じない。
- ⁹ 那覇などで火葬して遺骨が帰ってくる場合には、那覇の飛行場と与那国の飛行場で飛行機賃あるいは税金といって、空港の隅でそっと 30 円を落とすという。人によっては、飛行機の中で骨箱の中に 30 円を入れるという。この場合の 30 円は 300 万円と考えるという。これは空港の使用料でありその地の神様に収める税金であるという。無事に生まれ島にかえるためには死者は帰途それ相応のお金を払わなければならないのである。タビで亡くなった死者が家に着くまでの道のりは厳しく、帰って来た死者の慰撫は“ムヌチ”の役割だった。
- ¹⁰ 米城は事故死した人を屋敷内へ入れる前に厄払いをする「かまち」について写真とともに、紹介している（米城 2010：598）。藁で編んだ直径 1 m くらいの輪であるが、筆者が M 家でみたイットと同じである。
- ¹¹ 昔は着物の襟に針を 3 本つけたが、これは針で水を買って飲みなさいという意味だという
- ¹² グズとは、グショー、グソーともいわれ、後生、あの世のことである。
- ¹³ これは茶碗に入れた塩水を身内の者がそれぞれ自分の額と死者の額とにつけて別れをするものであって、これを別れの水を付けるといった（赤田 1983：61）。しかし、今回は叔母の U 氏がそれぞれの額に水を付けてあげている。葬儀のやり方が変化していることはこのような面からもわかる。
- ¹⁴ 今の人は別れに際して声を出さないが、情けがないからだといわれている。
- ¹⁵ ミラヌウタはもともと男女の恋の歌をうたったものと言われている。明治の頃、野良仕事の場で歌ったものが曲調が哀調を帯びていることから葬送歌として使われるようになったといわれる（宮良 2007：87）。ここに紹介した与那国のトゥバラマの歌詞は竹富島ではグショーの歌として歌われている（大田 2012：168）。
- ¹⁶ 以前は葬列の際にも“あの世に行く歌”をうたったというのが今回は歌われなかった。与那国の葬送における哭き歌のしめる割合も少なくなっていることがわかる。
- ¹⁷ 三途の川や極楽などの仏教用語も与那国では一般的に用いられている。

¹⁸ ユタが竈を叩きながら葬列に加わったという赤田の報告を思い起こしてほしい。

参考文献

- ・ 赤田光男 1983「与那国島の葬制と祖先信仰」『帝塚山短期大学紀要 人文・社会科学編』20号 pp.57-80
- ・ 新城敏男 1973「仏教の伝播と信仰」宮良高弘編『八重山の社会と文化』木耳社 pp.173-214
- ・ 池間栄三 2007(初版1959)『与那国の歴史』池間苗
- ・ 石垣市総務部市史編集室 1991年『石垣市史叢書1 慶来慶田城由来記・富川親方八重山島諸取縮帳』石垣市役所
- ・ 伊藤良吉 1973「八重山よなぐに島の葬制・墓制—調査ノートより—」『フォクロア』18-21 合併号 伊勢民俗学会 pp.1-6
- ・ 伊波普猷 1979「南島古代の葬制」土井卓司・佐藤米司『葬送墓制研究集成 第1巻 葬法』名著出版 pp.151-179
- ・ 植松明石・大沼美智子 1980「人生儀礼」植松明石・渡辺欣雄『沖縄最西端与那国島における伝統文化と外来文化—周辺諸文化との比較研究』東京与那国研究会 pp.91-104
- ・ 大田静男 2012『とうばら—まの世界』南山舎
- ・ 喜舎場永珣 1977「八重山列島の葬礼習俗」『八重山民俗誌 上巻・民俗編』沖縄タイムス社 pp.612-636
- ・ 古谷野洋子 2011「八重山の念仏者、その受容と葬送の変容—波照間島のサイシの事例を中心に—」『比較民俗研究』25号 pp.91-112
2012「沖縄の葬送における経巾の習俗—八重山・宮古における事例を中心に」『沖縄文化』第46巻2号 pp.34-61
- ・ コルネリウス・アウエハント、静子・アウエハント撮影、静子・アウエハント編集 2004『写真集 波照間島—祭祀の空間』榕樹書林
- ・ 酒井卯作 1987『琉球列島における死霊祭祀の構造』第一書房
- ・ 酒井正子 2005『奄美・沖縄 哭きうたの民族誌』小学館
- ・ 佐喜真興英 1925『シマの話』郷土研究社
- ・ 杉島敬志 1980「他界・祖先・サワリ」植松明石・渡辺欣雄『沖縄最西端与那国島における伝統文化と外来文化—周辺諸文化との比較研究』東京与那国研究会 pp.34-38
- ・ 原 知章 2000『民俗文化の現在 沖縄与那国島の「民俗」へのまなざし』同成社
- ・ 外間守善・波照間栄吉 1997『琉球国由来記』角川書店
- ・ 宮良保全(宮良純一郎編集) 2007『与那国島の民謡とくらし』あけぼの出版
- ・ 米城 恵 2010「葬式から三十三年忌まで」与那国町史編纂委員会事務局『与那国町史第二巻 民俗編 黒潮源流が刻んだ島・どうなん 国境の西を限る世界の生と死の位相』与那国町役場 pp.552-625、および同書の編集後記〇氏